



Title	〈推定表現〉と〈質問表現〉の交渉
Author(s)	高山, 善行
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1986, 20, p. 1-19
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/47752">https://hdl.handle.net/11094/47752</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## △推定表現▽と△質問表現▽の交渉

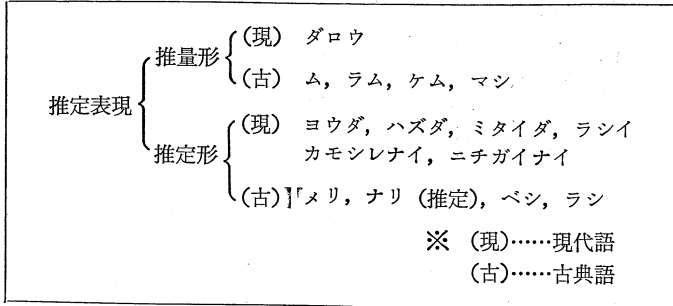
高 山 善 行

### はじめに

従来、△推定▽△推量▽という△判断のモード<sup>(1)</sup>▽の意味は、文末辞によってになわれている、ととられてきた。しかし、文表現において、それらの文末辞が単独で、△推定する▽△推量する▽という表現意図を積極的に実現しているとはみとめがたい。また、そうみとめてしまうと、文末辞の意味的差異を指摘するにとどまり、文の表現性は見えてこないようにおもわれる。

そこで、本稿では、△推定表現▽と△質問表現▽の交渉をとおして、文末辞の意味的差異ととらえられてきた△推定▽と△推量▽を△推定すること▽△推量すること▽という表現意図のレベルに位置づけて、両者の表現性のちがいをあきらかにしようところをみる。

図(1)



### 一・一 推定表現の範囲

最初に、今回とりあげる△推定表現▽の範囲をしめしておこう。森重敏(1959)、国立国語研究所(1960)でしめされているように、△推定表現▽には、

(1) 文末辞によるもの  
(2) 助詞ト＋思考・認知にかかわる動詞によるもの  
の二つがある。具体的な形式は、

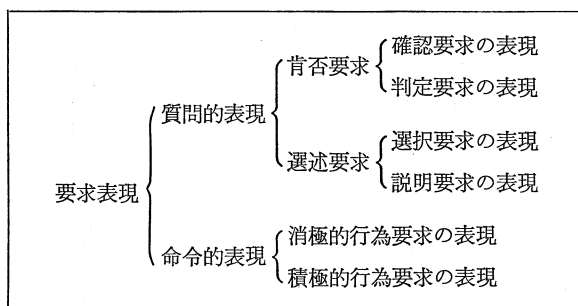
- (1) ダロウ、ヨウダ、ハズダ、ミタイダ、ラシイ、カモシレナイ、ニチガイ  
ナイ／以上現代語 ム、ラム、ケム、マシ、メリ、ナリ(推定)、ベシ  
ラシ／以上古典語
- (2) トオモワレル、トミエル、トミル……／以上現代語 トオボユ、トミ  
ル、トミユ……／以上古典語

であり、(1)と(2)の意味的なレベルがちがっていることは、

- ① 雨が降るにちがいないとおもわれる。  
② 足が弱っているらしいとみえる。

のような共起の用例の存在によってあきらかであって、両者を一括してあつかうことはできない。今回は、文法的形式による表現の(1)のみを考究の対象とし、(2)

図(2)



は別稿にゆずることにする。

ところで、(1)のなかには従来、△推量▽ととらえられてきたものと、△推定▽ととらえられてきたものが混在している。説明の便宜上、前者を△推量形▽、後者を△推定形▽と仮称しよう。それぞれ、△推量表現のための文法的形式▽△推定表現のための文法的形式▽の意である。(図1)

## 一・二 質問表現の範囲

次に、本稿であつかう△質問表現▽の範囲をしめしておこう。国立国語研究所(1960)では、△質問表現▽を△要求表現▽の体系のなかで位置づけている。(図2) 本稿はこれにもとづき、△質問表現▽として、△確認要求▽△判定要求▽△選択要求▽△説明要求▽の四種の表現をとりあげて、それぞれについて△推定表現▽との交渉を見ていくことにする。なお、南不二男(1985)の立場にもとづき、質問の形式をしていながら、△つぶやき▽△気づき▽△反語▽△勧誘▽△やわらかい命令▽△婉曲▽などを表現するものは、△質問表現▽としてはとりあつかわない。

## 二・一 △推定表現▽と△質問表現▽の交渉の実態

### 二・一・一 説明要求の表現

△説明要求▽の表現とは、

- ③ いつ旅行に行くの？
- ④ どこへ案内しようか？

のように、イツ、ドコ、ダレ、ナニ、ドレといった△不定詞▽をつかって、その表現の内容を説明することを相手にもとめるものである。△推量形▽△推定形▽は、この表現とどのようにかわるだろうか。

△推量形▽は、

- ⑤ いつ試合が始まるのだろうか？
- ⑥ だれが先発するのだろうか？
- ⑦ なにがおこるのだろうか？
- ⑧ どれを使えばいいのだろう。

のように、無理なく生起できる。それに対して、△推定形▽は、

⑨ \* なにが始まるようだ／はずだ／みたいだ／らしい／かもしれない／にちがいない？  
のように、すべて不自然である。<sup>(2)</sup>

では、古典語ではどうだろうか。古典語では、イツ、イツク（イツコ）、タレ（タ）、ナニ、イヅレ……などの

△不定詞Vによって、△説明要求Vの表現がなされていたとおもわれる。

まず、△推定形Vは、

⑩ かく人迎へたまへり、と聞く人、「誰ならむ。おほろけにはあらじ」とささめく。  
(若紫)

⑪ 中将「いつまた対面たまはらんとすらん。さりとにかくてやは」と申したまふに、  
(須磨)

⑫ 宣旨「禊を神はいかがはべりけん」など、はかないことを聞くゆるも、  
(朝顔)

⑬ また、源氏「かかる世の古事ならでは、げに何をか紛るることなきつれづれを慰めまし。」  
(螢)

のように、ム、ラム、ケム、マシ、すべて△不定詞Vと共起している。

ところが、△推定形Vはベシを除けば、メリ、ナリ、ラシ、いずれも△不定詞Vと共起しない。『万葉集』『古今和歌集』『枕草子』『源氏物語』の四作品中、ベシ以外の△推定形Vが△不定詞Vと共起しているのは、次の二例のみであった。<sup>(3)</sup>

⑭ し、思しかけざりし事なれば、尽きせずいみじうなむ。なのめにかたはなるをだに、人の親はいかが思ふ  
める。ましてことわりなり。  
(葵)

⑮ 内大臣「さて、いかが定めらるなる。親王こそまづはし得たまはむ。」などのたまひては、  
(常夏)

これらは例外で存疑とするにとどめる。なお、ベシは△推定形Vとはいえ、他の△推定形Vとは性格がちがったものである。これは、考究がすすむにしたがってあきらかになるであろう。

以上、現代語においても古典語においても、△説明要求Vの表現にかかわるのは△推量形Vであり、△推定形Vはこれにかかわらないという事実がまとめられる。

## 二・一・二 判定要求の表現

△判定要求Vの表現とは、

⑩ 明日は雨が降りますか？

⑪ あなたは学生さんですか？

のように、相手にイエスカノーかの判定をもとめる表現である。この表現と△推量形V△推定形Vとのかかわりについてみていこう。

まず、△推量形Vは、

⑫ 明日は雨が降るだろうか？

⑬ あなたは学生さんでしょうか？

のように、生起することができる。一方、△推定形Vは、

⑭ \*明日は雨が降るよう(だ)か／はず(だ)か／みたい(だ)か／らしいか／かもしれないか／ちがいないか？

のように、すべて、不自然である。

古典語ではどうか。古典語では、係助詞や、カによって△判定要求Vが表現されていたとおもわれる。そこで、カ、カの結びになるかどうかについて、先の四作品でしらべてみると、△推量形Vは、

⑮ 女御「草の文字はえ見知らねばにやあらむ、本末なくも見ゆるかな」とて賜へり。(常夏)

⑯ 源氏「いと乏しきに、さやうならむもののくさはひ、見出でまほしけれど、名のりものうき際とや思

ふらん、さらにこそ聞こえね。い」と、ほほ笑みてのたまふ。

(同)

㉓ 源氏「昨日、風の紛れに、中將は見たてまつりやしてけん。かの戸の開きたりしによ」とのたまへば、

(野分)

㉔ 惟光「し、殿の御心おきてを見るに、見そめたまひてん人を、御心とは忘れたまふまじきにこそ、いと頼もしけれ。明石の入道の例にやならまし」など言へど、

(少女)

のように、例がみられる。一方、△推定形∨は、やはり、ベシ以外はや、カの結びとなることがない。

以上の事実によって、現代語、古典語の△判定要求∨の表現にかかわるのは△推量形∨であり、△推定形∨はこれにかかわらないことがわかる。

## 二・一・三 選択要求の表現

△選択要求∨の表現とは、△判定要求∨の表現が二つ以上連結し、そのどちらかの判断を相手に選択することを要求するものである。たとえば、

㉕ いったい、歌うのか、歌わないのか？

㉖ 目的地は、高知か徳島か？

△判定要求∨と関係のふかい表現であることから、△推量形∨の生起、△推定形∨の不生起が予想される。はたして、△推量形∨は、

㉗ 歌うのだろうか、歌わないのだろうか？

㉘ 目的地は、高知だろうか、徳島だろうか？

のように生起するが、△推定形∨は、

㊤ \*歌うよう(だ)か、歌わないよう(だ)か／／はず(だ)か、／はず(だ)か／／みたい(だ)か、／みたい(だ)か  
／／らしいか、／／らしいか／／かもしれないか、／／かもしれないか／／にちがいないか、／／にちがいない  
か

とすべて生起しない。

ところで、古典語では、

㊦ 物よりのぞきなどして、それかあらぬかと見定めむ

(浮舟)

㊧ 年の内に春はきにけりひととせを こそとやいはんことしとやいはむ

(古今・春上)

のように、△選択要求Vの表現とおもわれる例がいくつかみられる。しかし、発話者の単なる疑念ともとれるし、認定がむずかしい。

## 二・一・四 確認要求の表現

△確認要求Vの表現というのは、話し手が自己の判断をもちだして、相手に確認を要求する表現である。したがって、純粹に未知の情報をもとめていこうとした、△説明要求V△判定要求V△選択要求Vとは対照的な性格の質問表現といえよう。たとえば、

㊨ 明日は休みじゃない？

㊩ あなた、泣いてるのね？

などは、△明日は休みであるということV△あなたが泣いているということVをもちだして、△ソーナンドネVと確認しているのであろう。△確認要求Vの表現には、△推量形V△推定形Vともにかかわっている。

③4 お店はもうかつてるんだらう？

③5 お店はもうかつてるようじやない／はずじやない／みたいじやない／らしいじやない／かもしれないじやない／にちがいないじやない？

△説明要求▽△判定要求▽△選択要求▽の表現にかかわらなかった△推定形▽が、この△確認要求▽の表現にかかわってくるという事実は注意しておく必要がある。

一方、古典語で△確認要求▽にふかくなかかわっているのは、終助詞カシをもちいた表現であろう。カシの意味は、一般に、△念押し▽△確認▽△表現をやわらげる▽などと理解されているけれども、本稿の立場から、もっとも注目されるカシの特徴は、△不定詞、およびヤ、カの係り結び文に生起しない▽ということである。<sup>(4)</sup>この特徴と従来の理解とをかんがえあわせるならば、カシは△確認要求▽の表現の標識(marker)とみてよさそうである。さて、カシには△推量形▽△推定形▽ともに前接する。

③6 源氏「久しう削ぎたまはさめるを、今日はよき日ならむかし」とて、  
(葵)

③7 空の色物の音も、春の調べ、響きはいとことにまさりけるけちめを、人々思しわくらむかし。夜もすがら遊び明かしたまふ。  
(胡蝶)

③8 国守参りて、御設け、例の大臣などの参りたまふよりは、ことに世になく、仕うまつりけむかし。いとほしたなければ。  
(曙標)

③9 「いづ方にもいづ方にもよりて、めでたき御宿世見えたるさまにて、世にぞおはせましかし。あさましくはかなく心憂かりける御心かな」など、  
(蜻蛉)

④〇 へ、世にゆるさるまじきほどの事をば、思ひ及ばぬものとならひたりけん、今の世には、すぎすぎしく乱りがはしき事も、類にふれて聞こゆめりかし。  
(若菜上)

④① 今日、ひねもすに吹く風の音もいと心細きに、おはしたる人も、僧都「あはれ山伏は、かかる日にぞ昔は泣かるなるかし」と言ふを聞きて、  
(手習)

④② 馬頭「へ男の朝廷に仕うまつり、はかばかしき世のかためとなるべきも、まことの器ものとなるべきを取  
り出ださむにはかたかるべしかし。  
(帚木)

個別的な問題としては、ナリカシ、ベシカシ、マシカシの用例数がきわめてすくないことが注意されよう。

本項では、現代語、古典語ともにへ推量形／へ推定形／がへ確認要求／の表現にかかわっていることについて述べた。

## 二・二 叙法副詞と質問表現

文末以外でへ判断のムード／にかかわるものとして、叙法副詞がある。<sup>(5)</sup> 具体的には、

キット、カナラズ、ゼツタイ(ニ)、オソラク、タブン、サゾ、オオカタ、タイテイ、タイガイ、ドウヤ  
ラ、ドウモ、ヨホド(ヨッポド)、アルイハ、モシカスレバ(シタラ)、ヒョットシタラ、コトニヨルト、ア  
ンガイ……

などをあげることができよう。それらと質問表現とは、どのように交渉するであろうか。

結論を先にいえば、文末の△推定形Vとおなじ交渉のしかたをする。つまり、△説明要求V△判定要求V△選択要求Vにはかわらず、△確認要求Vとのみかわることになる。<sup>(6)</sup>まず、

④③ \*いつ、たぶん試合が始まる？

④④ \*どこで、きつと昼食を食べる？

でわかるように、△説明要求Vの表現にはかわらない。次に、

④⑤ \*よし子が大阪にいるのはたぶんか？

④⑥ \*西川候補が当選するのはおそらくか？のように、△判定要求Vの表現ともかわらない。また、

④⑦ 彼は来るだろうか、来ないだろうか？

④⑧ ピンチヒッターは、永尾だろうか、長崎だろうか、川藤だろうか？

とは言えても、

④⑨ \*彼はたぶん来るだろうか、来ないだろうか？

④⑩ \*ピンチヒッターは、おそらく、永尾だろうか、長崎だろうか、川藤だろうか？

などは言えないから、△選択要求Vの表現ともかわらないことがわかる。ところが、△確認要求Vならば、

⑤① きつと、そうか？

⑤② ぜったいにか？

のように、生起するものもある。ただ、意味するところの△確実度Vのひくいものは、生起しにくいようである。

⑤③ ? たぶんか？

表 交渉の実態

質問表現	判断モードの表現形式	推定形	推量形	叙法副詞
説明要求	(現)	×	○	×
	(古)	×	○	—
判定要求	(現)	×	○	×
	(古)	×	○	—
選択要求	(現)	×	○	×
	(古)	—	—	—
確認要求	(現)	○	○	○/×
	(古)	○	○	—

さて、交渉の実態を表にまとめておこう。

### 三・一 事態と主体

前節で見てきた交渉の実態をふまえて、 $\wedge$ 推定すること $\vee$ と $\wedge$ 推量すること $\vee$ とのちがいについてかんがえてみ

⑤4? おそらくか?

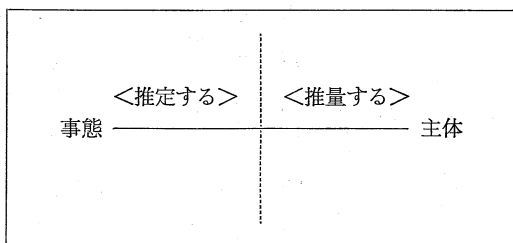
⑤5? ひょっとしたらか?

⑤6? ことによるとか?

これは、 $\wedge$ 確かなことがら $\vee$ をもちだして、相手に確認をもとめる、という $\wedge$ 確認要求 $\vee$ の基本的性格からすれば、当然のことといえよう。

なお、古典語では、叙法副詞が発達していなかったので、質問表現との交渉をみることができない。叙法副詞が発達していない分、 $\wedge$ 確実度 $\vee$ のこまかい標示は、文末に託されていたものとおもわれる。たとえば、ヌベシ、ツベシ、テム、ナムなどのツ、ヌは、その標示にふかくかわっていたのであろう。古典語<sup>(7)</sup>においては、現代語のように $\wedge$ ことがら $\vee$ の $\wedge$ 確実度 $\vee$ を分析的に表現するという必要性がなかったという解釈も成り立つであらう。

図(3)



たい。具体的には、なぜ△推量形Vが質問表現（△確認要求Vを除く）にかかわり、△推定形Vがかかわらないかについて考究することになろう。

まず、考究をはじめる前に、従来いわれてきた、△推定形Vと△推量形Vの意味的性格を確認しておく。

△推定形Vは、△詞的V△客体的V△事柄にちかいVといわれており、それとの比較において、△推量形Vは、△辞的V△主体的V△事柄にちかいVというところえかたがなされている。これらを筆者なりにまとめると、△事態—主体V間において、△推定形Vは、事態より位置し、△推量形Vは、主体より位置しているといえよう。（図3）

この位置づけは、いろいろな点から支持されよう。たとえば、相互承接の際、△推定形Vが△推量形Vに上位すること。△推定形Vはほとんどの活用形がそろっているが、△推量形Vには、終止形とまれに連体形が存する程度であること。また、

⑤7 彼女は結婚するらしいかった。

⑤8 彼は落ち込んでいるみたいだった。

⑤9 \*彼は落ち込んでいるだろうた。

のように、△推定形Vはすべてテンスが分化しているが、△推量形Vには分化していないこと。<sup>(9)</sup>

⑥0 F君は人気者らしいのだ。

⑥1 F君はアルバイトをやめたようなのだ。

⑥2 \*F君はアルバイトをやめただろうのだ。

のように、 $\wedge$ 推定形 $\vee$ は、 $\square$ ノダの $\square$ にふくみこまれるが、 $\wedge$ 推量形 $\vee$ はふくみこまれないこと、など。 $\wedge$ 推定形 $\vee$ が事態より、 $\wedge$ 推量形 $\vee$ が主体より位置する判断の表現であることが了解されよう。こういう、 $\wedge$ 事態—主体 $\vee$ 間における位置関係のちがいが、質問可能か質問不可能かにかかわっているとおもわれる。

### 三・二 判断の根拠

従来、 $\wedge$ 推定 $\vee$ と $\wedge$ 推量 $\vee$ のちがいについて、前者を $\wedge$ 根拠にもとづく判断 $\vee$ 、後者を $\wedge$ 根拠のうすい判断 $\vee$ ととらえる見方もあった。そこで、本項では、先に検討した $\wedge$ 事態—主体 $\vee$ 間における $\wedge$ 推定形 $\vee$ / $\wedge$ 推量形 $\vee$ の位置関係と関連づけながら、 $\wedge$ 根拠 $\vee$ のかかわりについて述べたい。

⑥3 台風が来るので旅行は延期になるだろう／ようだ／はずだ／みたいだ／らしい／かもしれない／ちがいない。  
ない。

⑥4 足をけがしたから出場は無理だろう／のようだ／のはずだ／みたいだ／らしい／かもしれない／ちがいない。  
い。

のような、 $\wedge$ ノデ従属節 $\vee$ / $\wedge$ カラ従属節 $\vee$ は、判断の根拠となる事態をしめしているといえる。<sup>(10)</sup>主節においては、 $\wedge$ 推量形 $\vee$ / $\wedge$ 推定形 $\vee$ ともに生起するが、根拠をあらわす従属節において、あらわれ方にちがいがでくる。つまり、

⑥5 台風が来るような／はずな／みたいな／らしい／かもしれない／にちがいないので旅行は延期だ。

⑥6 \* 台風が来るだろうので旅行は延期だ。

のように、△ノデ従属節△には△推定形△は生起するが、△推量形△は生起しない。また、

⑥7 台風が来るだろうから旅行は延期しよう。

も、ややかたい印象をあたえる。これも、△推量形△に主体的色合が濃いため、確信をもって△根拠△となる事態を述べあげる際にはもちいられにくいのではなからうか。それに対して、主体的色合が稀薄で、事態よりの△推定形△は、△根拠△をしめす事態の世界にあるのだろう。

これとおなじような現象は古典語にもみられる。△已然形+バ△による確定条件法で原因、理由をあらわす節内には△推定形△が生起する。

⑥8 母君「……若宮は、いかに思ほし知るにか、参りたまはむことをのみなん思し急ぐめれば、ことわりに悲しう見たてまつりはべるなど、」 (桐壺)

⑥9 源氏「……経などもあまたありけるを、なにがし僧都みなその心くはしく聞きおきたなれば、また加へてすべき事どもも、かの僧都の言はむに従ひてなむものすべき」などのたまふ。 (幻)

⑦0 弁ぞ、「かやうの御供にも、思ひかけず長き命いとつらくおぼえはべるを、人もゆゆしく見思ふべければ、今は、世にあるものとも人に知られはべらじ」とて、 (早蕨)

それに対して、△推量形△はおこりえない。メバ、ラメバ、ケメバの用例はみられないし、マシカバは仮定条件であらわしている。

このように、現代語においても古典語においても、根拠となる事態を述べあげる際には△推定形√がつかわれやすく、△推量形√はきわめてつかわれにくいことがわかる。

### 三・三 表現意図としての相違

ここで、いよいよ、△推定する√という表現意図と△推量する√という表現意図のちがいについて述べよう。

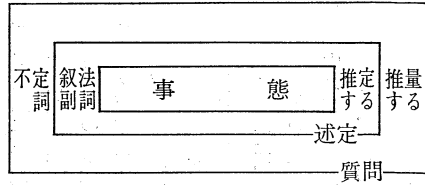
先に考察してきたように、事態を述べ定める（これを述定とよぼう）うえで、その述べ定め方にちがいがあった。それを△事態―主体√間に位置づけてとらえようとしたわけである。したがって、それは、△推定すること√△推量すること√を述定の諸段階に位置づけるころみといえよう。そのなかで、△推定すること√は、述定の範囲内のみ存し、△事態を述べ定める√という表現意図の影響をもろにうけている。のみならず、根拠をも表現しうる段階である。それに対して、△推量すること√は、その影響がすくなく、述定の範囲をこえて質問と接触する段階である。前者は、現象を写しとることの延長線上にあるが、後者は、現象をはなれて、発話者の心のなかを開いてみせている。したがって、両者は表現意図のレベルを異にすると言わねばなるまい。その境界線は、質問表現との交渉をとおしてうかびあがってくるのである。

また、二・二で確認したように、叙法副詞も事態よりに位置し、述定の世界にとどまるであろう。一方、同じ副詞的成分であっても、△不定詞√は事態からはなれて、△推量形√や助詞カなどと相関して、質問表現を成り立たせている。

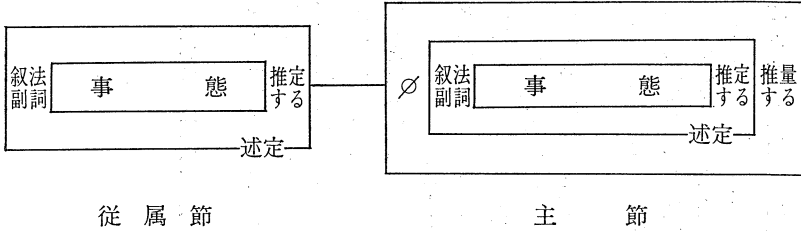
付言すれば、古典語では述定を積極的におしだす形式として、係助詞ナムをもちいた係り結びがあった。△推量

## 図(4)

## (i) 単文レベル



## (ii) 複文レベル



※古典語では叙法副詞が無標(unmarked)になる。

形Ⅴがナムの結びになりにくく、Ⅴ推定形Ⅴが比較的になりやすいのも、そのあらわれであろう。その意味で、ⅤナムーケルⅤをⅤ物語る文Ⅴととらえることは、ただし理解であるといえよう。

## 四 まとめ

単文レベル、複文レベルの文構造におけるⅤ推定するⅤとⅤ推量するⅤの位置づけを図4にしめし、まとめにかえる。

## おわりに

Ⅴ推定することⅤとⅤ推量することⅤというレベルのちがう二つの表現意図は、古代から現代にいたるまで、脈々と生きつづけてきた。そのなかで、現代語におけるⅤ推定形Ⅴの種類豊富さは、事柄の意味を重んじ、分析的表現をこのむ近現代日本語の傾向の一つのあらわれである

## 注

(1) 仁田義雄 (1985) 参照

(2) ヨウダ、ラシイが疑問化できないことについては、國廣哲彌編 (1982)、寺村秀夫 (1984) などに指摘がある。ただし、 $\wedge$ 反問 $\vee$ は可能である。

(3) ⑭の例は、すでに、松尾捨治郎 (1936) が指摘している。

(4) 佐田智明 (1978) に指摘がある。

(5) 叙法副詞の定義については、工藤浩 (1983) にしたがう。

(6) 川端善明 (1983) では、叙法副詞のあらわす $\wedge$ 推定 $\vee$ を疑問と対立的に位置づけている。

(7) 通時的にみれば、ツ、ヌの消滅と叙法副詞の発達とは相関があるかもしれない。

(8) 仁田義雄 (1983) はタの下接しうる $\wedge$ 判断のムード $\vee$ の表現形式を $\wedge$ 擬似ムード $\vee$ とよんでいる。

(9) 古典語の $\wedge$ 推定形 $\vee$ にもテンスの分化がみられる。たとえば、メリキ(ツ)、ナリキ(ツ)、ベカリキ(ツ)など。

(10)  $\wedge$ ノデ従属節 $\vee$ と $\wedge$ カラ従属節 $\vee$ の表現性のちがいについては、言語学研究会 (1985) にくわしい記述がある。

原因的なつきそい・あわせ文において、つきそい文が「するので」のかたちをとるばあいは、つきそい文もいとおわり文も、はなし手である $\wedge$ 私 $\vee$ の意識のそとで進行しているレアルな出来事をえがきだしている。

—中略—

これにたいして、「するから」のかたちをとるばあいは、この原因・結果の関係は、はなし手である $\wedge$ 私 $\vee$ が設定するというすがたをとってあらわれてくる。その意味では主体的である。

(11) 山口堯二 (1929) では、このようなマシカを未然形とみている。

もし、已然形の「ましか」に接続助詞「ば」が接しうるものなら、はたらきの上で「まし」にもっとも近い「む」の已然形「め」にも、「めば」という形の用法があつてよさそうに思うが、そのような形は見当らないであらう

ところ。

(12) 阪倉篤義 (1956) に、

……「なむ」という助詞もまた、本来、聞き手への確かめを意図して用いられるものであって、かくしてここに、「なむ……ける」という形を持った表現は、いわゆる「物語る」という叙述の様式にとって、正にふさわしいものであり得たのである。

とある。また、和歌においてナムの係り結びがきわめてすくないことも、その表現意図に起因するとおもわれる。

参考文献

- 松尾捨治郎 (1936) 『国語法論攷』(文学社)
- 阪倉 篤義 (1956) 『竹取物語の構成と文章』、『国語国文』昭31・11 後に『文章と表現』・角川書店 に所収)
- 森重 敏 (1959) 『日本文法通論』(風間書房)
- 国立国語研究所 (1960) 『話しことばの文型(1)』(秀英出版)
- 山口 堯二 (1967) 『まし』の意味領域』、『国語国文』昭43・5 後に『論集日本語研究7・助動詞』・有精堂 に所収)
- 佐田 智明 (1976) 『平安朝における終助詞「かし」について』(『春日和男教授退官記念語文論叢』昭53・11・桜楓社)
- 仁田 義雄 (1981) 『可能性・蓋然性を表わす擬似ムード』、『国語と国文学』昭56・5 特集号)
- (1985) 『文の骨組』、『応用言語学講座1・日本語の教育』・明治書院 所収)
- 工藤 浩 (1982) 『叙法副詞の意味と機能』、『国立国語研究所報告』71)
- 國廣哲彌編 (1982) 『ことばの意味3』(柴田武氏担当部分・平凡社)
- 川端 善明 (1983) 『副詞の条件』、『副用語の研究』・明治書院 所収)
- 寺村 秀夫 (1984) 『日本語のシタタスと意味II』(くろしお出版)
- 南 不二男 (1985) 『質問文の構造』、『朝倉日本語新講座4・文法と意味II』所収)
- 言語学研究会 (1985) 『条件づけを表現するつきそい・あわせ文(2)』、『教育国語』82・昭60・9)
- なお、質問表現の理解については、宮地裕 (1979) 『新版文論』(明治書院) (第一章文の意味「会話・表現文・文」および、「疑問表現」) に示唆を得たところが多い。